

ペットとの同行避難マニュアル



昭島市

1 はじめに

災害時には、何よりも人命が優先されますが、近年ペットは家族の一員であるとの意識が一般的になりつつあることから、ペットと同行避難をすることは、動物愛護の観点のみならず、飼い主である被災者の心のケアの観点からも重要であると考えられています。

一方避難所においては、動物が苦手な方やアレルギーをお持ちの方を含む多くの避難者が共同生活を送りますので避難所におけるペットの飼養については、周りの方への配慮が必要となります。

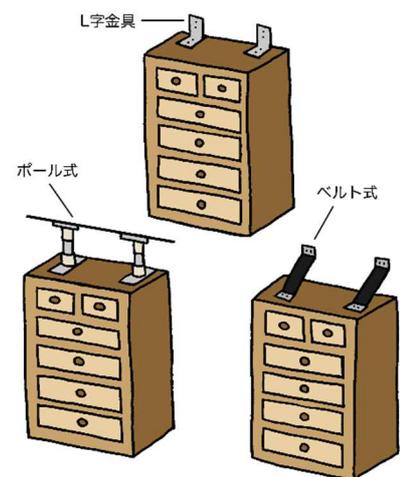
このため、ペットの同行避難を適切かつ円滑に行うためには、まず飼い主が日頃からの心構えや備えについて、しっかりと具体的に準備を行うことが重要になってきます。

災害はいつ起こるかわかりません、いざという時に適切な対応ができるよう災害の発生に備えておくことが大切です。

2 飼い主としての準備（平常時に飼い主が行うべき対策）

住まいや飼養場所の防災対策

災害発生時にペットを守るためには、まず飼い主が無事であることが重要です。そのためには、家具の固定など地震対策を行う必要がありますが、ペットが普段いる場所にも配慮することで、ペットの安全にもつながります。



また、犬を屋外で飼養している場合は、ブロック塀やガラス窓、倒れやすい建物等、飼養場所の周囲に破損や倒壊する恐れのあるものがないか確認しておくとともに、首輪・ハーネスやリードが外れたり切れたりして逃げ出すおそれがないかを確認することが必要です。



ペットのしつけと健康管理

災害発生時には、ペットもパニックになり、いつもと違う行動をとる可能性があります。こうした状況で、人とペットが安全に避難するためには、普段からキャリーバックやケージ等に入ること慣れさせておくことや、犬の場合は、「待て」、「おいで」などのしつけを行っておくことが必要です。



避難所におけるペットの飼養においては、人や他の動物を怖がったり、むやみに吠えたりしないこと、決められた場所で排泄ができることで、他人への迷惑を防止するとともに、ペット自身のストレスも軽減することができます。また、避難所等においては、ペットの免疫力が低下したり、他の動物との接触が多くなるため、普段からペットの健康管理には注意し、予防接種やノミなどの外部寄生虫の駆除を行い、ペットの健康、衛生状態を確保しておくことが必要です。さらに、不必要な繁殖を防止するための不妊・去勢手術を施すことにより、性的ストレスの軽減、無駄吠え等の問題行動の抑制などの効果が期待できます。



ペットが迷子にならないための対策

災害発生時には、やむを得ずペットを残して避難したり、ペットとはぐれてしまう場合もあります。保護された際に飼い主の元へ戻れるよう所有者の明示をしておくことが重要です。狂犬病予防法に基づく鑑札、狂犬病予防接種済票を飼い犬に装着することはもちろんですが、外から見えてだれでもすぐわかる迷子札を付けるとともに、脱落の可能性が低く、確実な身分証明となるマイクロチップを装着しましょう（登録機関への所有者情報の登録を忘れずに行いましょう）。



ペット用の避難用品や備蓄品の確保

避難先においてペットの飼養に必要なものは、基本的に飼い主が用意しておかなければなりません。また、ライフラインの被害や緊急避難などに備え、普段からペットとの避難に必要な物資の備蓄を行い、避難が必要な場合には一緒に持ち出せるようにしておきましょう。

特に療法食等の特別食を必要としているペットの場合には、さらに長期間分の用意が必要になります。備蓄品には優先順位をつけ、避難時に持ち出せるように、飼い主の避難用品と一緒に保管しておくことも重要です。



情報収集と避難訓練

避難指示などが出た場合に備えて、ペットと同行避難ができる避難所を調べておきましょう。

複数の避難ルートを考え、避難所までの所要時間や危険な場所を確認しておくことが、安全な避難につながります。

昭島市防災ガイドブックを活用し、住んでいる地域の避難場所などを把握して、災害への対策や避難方法について、日頃から家庭内で相談しておきましょう。



家族や地域住民との連携

地域で災害訓練などを行う時に、ペットを連れて避難する方法を、家族や地域住民の間で話し合っておきましょう。また、普段からご近所と良好な関係を築けるよう、コミュニケーションや飼養マナーに気を配るとともに、万が一の時はお互いに助け合えるよう飼い主同士やご近所のかたと防災について話し合っておくことも大切です。



ペットの一時預け先の確保

長期にわたる避難生活は、ペットにとっても大きなストレスとなります。ペットの精神的な負担を減らしてあげられるように、一時的に遠方の親戚や知人に預けるなどの方法も検討しましょう。



3 飼い主としての災害発生時の行動

災害が発生したら、何よりも自分の命を守ること、そして、けがをしないことが大切です。次にペットの安全を確保し、犬はすぐにリードを付け、猫は慣れたキャリーバックに入れるなど避難できる体制を確保することが大切です。

災害発生時に飼い主が行うべき行動

地震の場合は、地震発生後の5分くらいが避難開始のタイミングといわれており、次に予想される大きな余震、家の倒壊、火災の延焼などの事態を考慮し、屋内が安全であるのか、屋外が安全であるのかを冷静に判断しなければなりません。

屋外が安全であると判断した場合は、ペットと一緒に一時避難場所に落ち着いて避難することが必要になります。

避難所に避難しなければならない場合は、平常時に準備していた飼い主用及びペット用の非常持ち出し袋を持ち出せるよう準備するとともに、行先等を記入したメモを残すなど同行避難の準備を行うことが大切です。



ペットとの同行避難

準備した飼い主用とペット用の非常持ち出し袋を携行し、事前に計画しておいた経路を使用して、安全を確保しながら避難してください。

同行避難するペットが犬の場合は、リードを付け、首輪が緩んでいないか、鑑札、狂犬病予防注射



済票を装着しているか確認してください。小型犬はリードを付けたうえでキャリーバックやケージに入れてください。

猫の場合は慣れたキャリーバックやケージに入れ扉が開いて猫が逃走しないようしっかりと固定してください。また、マイクロチップを装着している犬・猫の場合、マイクロチップ登録証明書も忘れずに持参してください。

避難中のペットの飼養場所の確保

避難所は、動物が苦手な人や動物アレルギーを持っている人など、様々な人が生活を送る場所です。

人とペットが秩序ある共同生活を営むために飼い主はペットの鳴き声や毛の飛散、臭いなど普段以上に周囲へ配慮し、避難所で決められた飼養ルールを厳守してペットの適正飼養に努めることが重要です。



避難所での飼養は飼い主、他の避難者、ペットのいずれにとっても大きな負担です。

できるだけ早い段階でペットだけでもより飼養に適した場所へ移動することが大切です。

災害が落ち着き次第、被災を受けていない親戚宅や知人等の新たな預け先へ移動することも有効な手段です。



避難所に同行できるペットの種類は限られています、一般的なペット以外の動物は避難所での受け入れができないこともあります。